第二章　布留遺跡各地区の調査成果

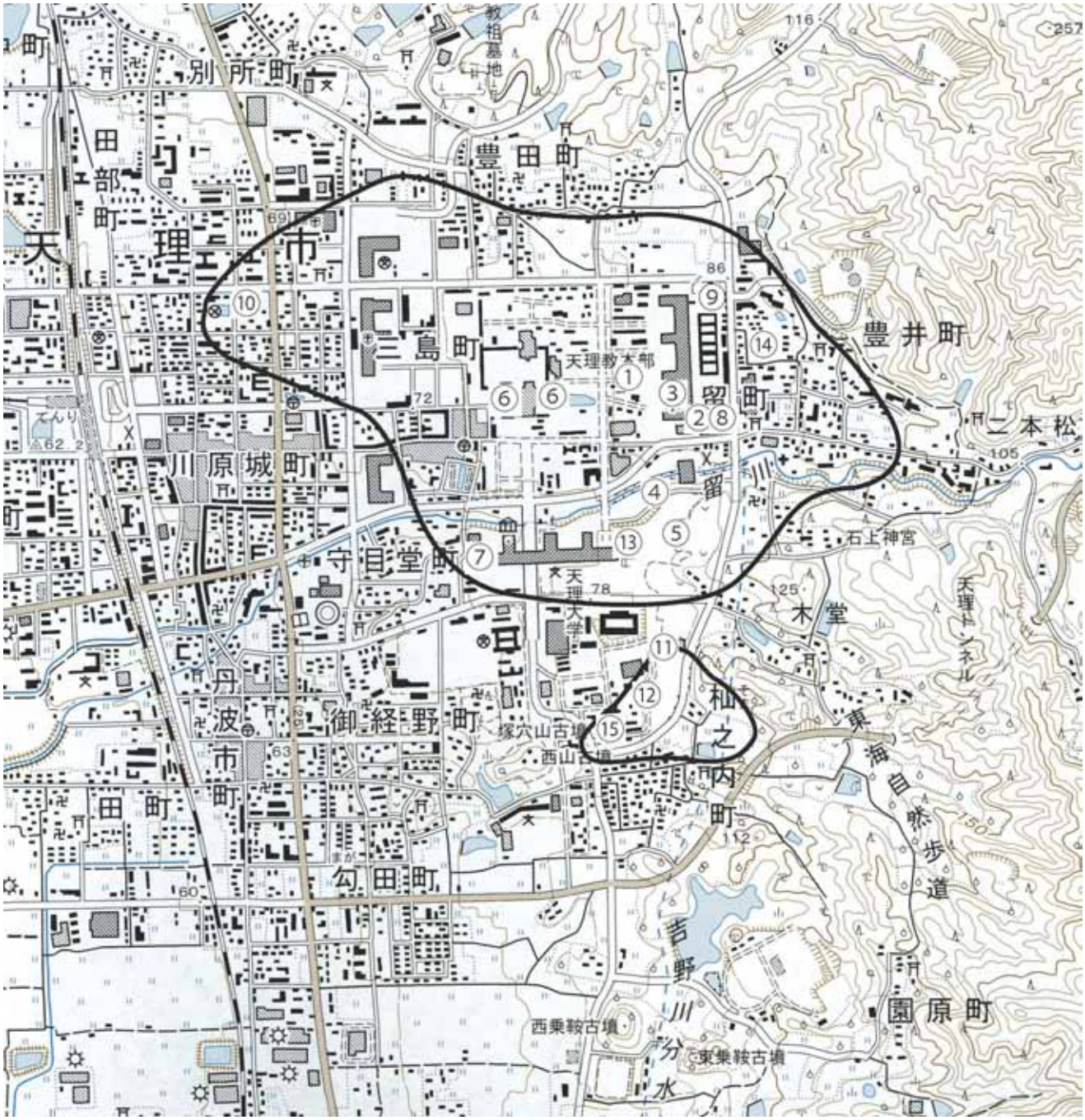


図 1　発掘調査の位置 (国土地理院「大和郡山」1:2,5000 を改変)

①布留 (堂垣内) 地区 (1938)
②布留 (堂垣内) 地区 (1954)
③布留 (アラケ) 地区
④布留 (西小路) 地区
⑤杣之内 (アゼクラ) 地区
⑥三島 (里中) 地区
⑦守目堂 (ツルクビ) 地区
⑧布留 (堂垣内) 地区 (1983 ～ 1985)
⑨豊井 (宇久保) 地区
⑩三島 (木寺) 地区
⑪杣之内 (赤坂) 地区
⑫杣之内 (北池) 地区
⑬杣之内 (樋ノ下・ドウドウ) 地区
⑭豊井 (打破り) 地区
⑮杣之内 (大東) 地区

1）第 1 次：布留 (堂垣内) 地区 (1938 年)

布留遺跡で最初に発掘調査が行われたのは、布留 (堂垣内) 地区であった。この調査は天理高等女学校のプール建設に際して遺跡が発見され、1938 年に末永雅雄・小林行雄・中村春壽などによって実施された。

調査では A・B・C 地点で石敷遺構が検出された。この敷石の上では木炭片を含んだ黒土層や灰層が認められたが、土器類はほとんどこの敷石から集中して出土した。土器は土師器甕･壺･高杯･小型丸底壺を主体としたもので、須恵器が少量ある。このほか、A 地点からはいわゆる滑石製模造品と呼ばれる玉類や櫛が出土しており、石敷遺構と祭祀との関わりを窺わせている。

ここから出土した土器の一群は、当時知られていた土師器の中でも古い様相を呈することから遺跡の名を取って、「布留式土器」の名が付けられた。これは今日、古墳時代前期の土師器を代表する名称となっていて、本調査が学史上大変重要な意味をもっていることが分かる。

このほか、この調査では、碧玉片などが出土しており布留遺跡で玉作りが行われていたことが推測された。また、鉄製品を作る時の残滓である鉄滓も出土している。

【文献】

末永雅雄ほか　1938「大和に於ける土師器住居阯の新例」『考古学』第 9 巻第 10 号

図 2　布留 (堂垣内) 地区 (1938 年調査) 出土遺物　5 世紀

２）第３次：布留（堂垣内）地区（1954 年）

1938 年の布留（堂垣内）地区の調査の後、布留遺跡では遺跡の東辺部における都市計画道路の建設やその西側の地域での大がかりな開発を契機として、1953 年より３年にわたる調査が天理参考館により実施されている。

1954 年には、1938 年の調査地点から南東に 150m 程離れたところで５世紀の祭場と見られる石敷遺構が検出されている。ここからは多数の土師器の壺や高杯のほか、石敷上からは土器片に混じって剣形石製品、有孔円板、勾玉、管玉、臼玉など、数千点に及ぶ滑石製模造品や、ガラス製小玉、碧玉製管玉が出土している。調査時の記録が不明なため、詳細は明らかではないが、中には土師器の壺の内部に勾玉や臼玉の残されたものが出土時の状態で保管されたものもある。

図３　石敷遺構調査風景　北より

【文献】

天理大学附属天理参考館　2012『大布留遺跡展－物部氏の拠点集落を掘る－』
日野　宏　2019『物部氏の拠点集落　布留遺跡』　新泉社

図４　布留（堂垣内）地区（1954 年調査）石敷遺構出土遺物　５世紀

3）第 4 次：布留 (アラケ) 地区（1955 年）

1938 年の天理高等女学校プール建設地の調査が行われた地点より東に約 60m のところで、工事中に埴輪片が群集して発見され、翌 1955 年 6 月に発掘調査が実施された。

出土地点では北西から南東に幅 0.4 ～ 0.7m の石列が約 7 m 以上にわたって延びており、埴輪はその北側から破片となって出土している。これらの埴輪にはその場に据えたようなものは認められず、無秩序に散乱したような状況であったが、いずれも押しつぶされたように出土しており、その多くが全体の復元が可能であった。その後の復元作業の結果、埴輪は円筒埴輪 10 個体、朝顔形埴輪 15 ～ 16 個体前後であったことが判明している。

これらの埴輪は外面にハケメを施した後、表面をナデ消した非常に丁寧な作りで、巴形や半円形、

図 5　復元された円筒埴輪・朝顔形埴輪　5 世紀

図 6　埴輪出土状況平面図・断面図

四角形、三角形など特異な形の透孔があることも大きな特徴である。付近に古墳の存在は考えられず、通常の埴輪とは異なった様相を呈していることから、これらは祭りの場で使用されたものであったと推定される。

また、同年には本地点より数 10m 南のところで、土師器高杯を中心とした土器群が検出されている。当時の記録は写真を除いて不明であるが、土器群は調査時に切り取られ保管されている。そこにはごく少量の須恵器と滑石製の臼玉も見られる。大半が高杯で臼玉などが見られることから、これらは祭りで使用されたものが一括して投棄されたものであろう。

【文献】

天理大学附属天理参考館　1989『布留遺跡出土の埴輪』　天理大学出版会

４）第 11 次：布留遺跡範囲確認調査（1976 ～ 1978 年）

布留遺跡の範囲確認調査は遺跡の範囲を確認する目的で 1976 年 6 月～ 1978 年 7 月に行われた。調査は幅 2.5m、長さ 10m の試掘溝を布留遺跡全体で 30 箇所に設定して行われた。試掘溝による調査であるため、検出した遺溝の全体が分かるものはない。しかし、いくつかの地区では注目すべきことが分かった。

従来、布留遺跡の始まりは縄文時代と考えられていたが、北端の豊田（ケヤキ）地区で、ナイフ形石器が出土し旧石器時代にまでさかのぼることが判明した。

図 7　豊田（ケヤキ）地区出土ナイフ形石器

弥生時代遺構の平面図

弥生時代遺構

東　壁

図 8　豊井（カンヅクリ）地区弥生時代遺構平面図

60cm、柱の径は約 25cm ある。柱穴の位置などから、この建物は一辺 7 m 以上の規模が推測されている。

古墳時代では、杣之内（アゼクラ）地区で、L 字形の石敷遺構が検出された。当初、この石敷は前方後方墳のくびれ部の葺石かと考えられたが、古墳の葺石とするにはその傾斜角度が低く、群馬県三ッ寺遺跡の豪族居館跡の例などから、古墳時代中期の豪族の居館の周囲を固める護岸と考えられるようになった。

中世では、北東端の豊田（野堂口）地区で、14 ～ 15 世紀の掘立柱建物群が見つかった。のちの周辺の調査と東方山頂にある豊田山城跡との関連から、中世豪族の豊田氏が残した遺構と推定されている。

近世の遺構は守目堂（大塚前）地区などで見つかっている。

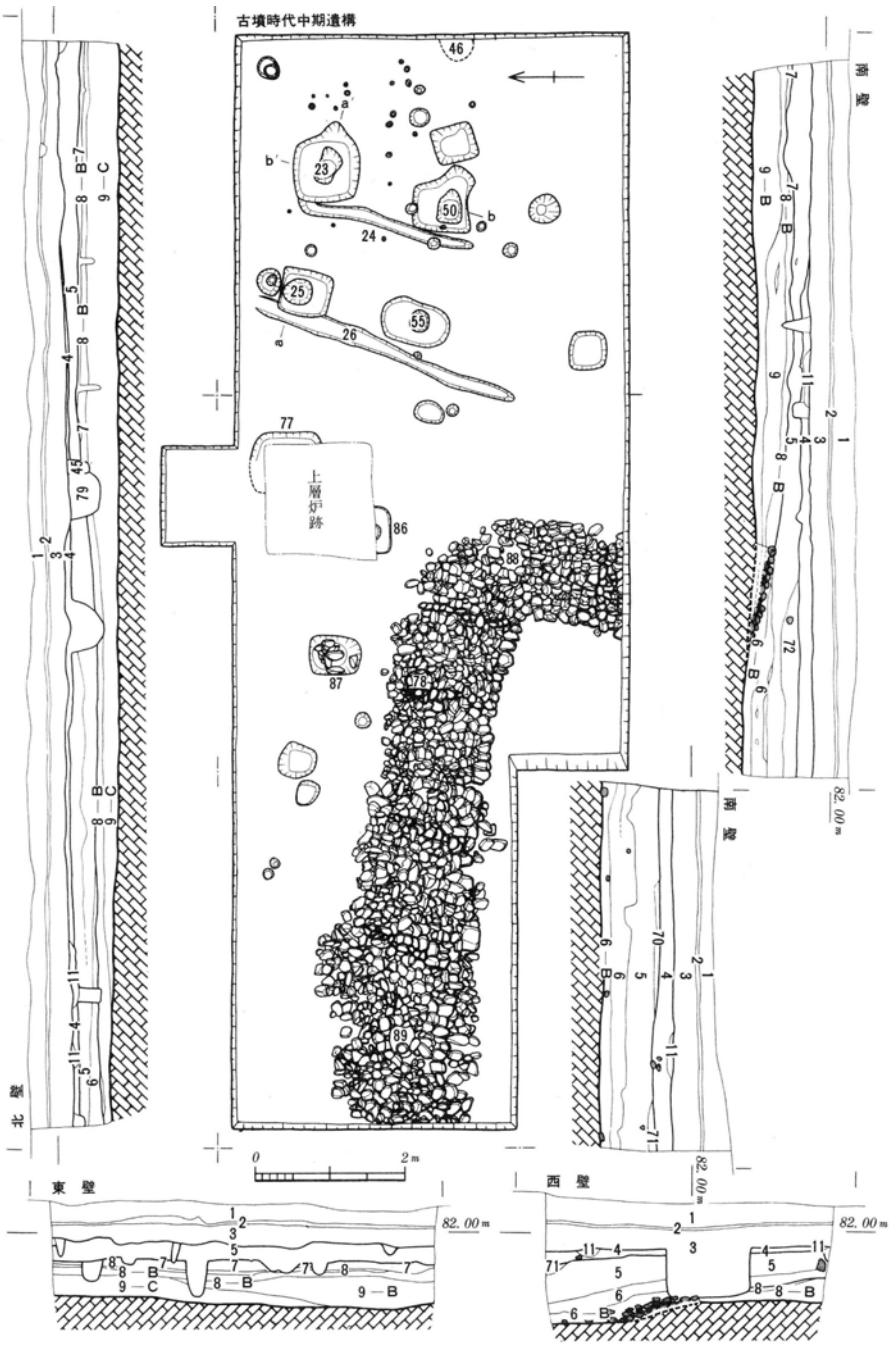


図 9　杣之内（アゼクラ）地区石敷遺構平面図・断面図

この範囲確認調査によって、布留遺跡は 1.5km 四方に及ぶ大規模な複合遺跡であると推測されるようになった。

【文献】

天理市教育委員会　1979『布留遺跡範囲確認調査報告書』

5）第 12 次：布留（西小路）地区（1976 年）

調査地は、布留川南岸の河岸段丘上及びその斜面にあり、1976 年 9 月～ 1977 年 3 月に 2,700 ㎡が調査された。ここでは暗褐色の遺物包含層の下に砂礫層がほぼ全面に厚く堆積しており、かつて布留川の氾濫原であったことが判明した。

調査区は大きく東部・中央部・西部の 3 地域に分かれる。調査によって古墳時代から室町時代にかけての溝・土坑・掘立柱建物・井戸などが検出された。出土した遺物は、縄文時代から近世にいたる、総計 10 万点を超す土器類のほか、鉄製品・石製模造品・玉類・石器・砥石・金銅製華瓶・銭貨・石臼・石鍋・馬歯骨・鉄滓・鞴羽口などがある。

東部地域は古墳時代には布留川の氾濫原であったと推定される地区である。地区の北側は布留川に向かって落ち込む傾斜地で、最下部に平安時代の堆積層が認められた。当時の布留川南岸に当たると推定された。川岸の斜面からは鎌倉～室町時代の土器・陶磁器・金銅製華瓶などの各種遺物が多数出土した。遺物包含層の厚さは最も厚い部分で約 80cm ある。段丘上には砂礫層が広がり、わずかではあるが縄文時代前期～古墳時代前期にかけての土器が含まれていた。砂礫層から出土した縄文土器は 6 片あり、いずれも前期から中期の爪形文土器などで、本調査でこの時期の縄文土器が布留川流域で初めて検出された。

中央部地域は大部分が古墳時代には布留川の氾濫原であったところで、調査地区の南西部に川岸に当たる高い部分がある。古墳時代に氾濫原であった場所では、鎌倉から室町時代に掘削され、室町時代に埋め戻された溝と、ほぼ同時期の石組の井戸が検出された。古墳時代の遺構は一段高くなったところで検出され、溝・柱穴・土坑などがある。土坑には韓式系の鍋を納めたもの (L.N.43) も認められた。

西部地域は古墳時代の氾濫原でも比較的安定した地域で、5 世紀を中心とした柱穴や溝、土坑などが検出された。土坑の中には単独で完形の土器が出土するものや、土師器甕を倒立して据えたもの (L.N.22) のほか、灰と炭化物が厚く堆積した大型の土坑 (L.N.99) からは須恵器や土師器、各種の滑石製模造品と共に多量の製塩土器が出土しており祭祀との関係が注目された。

また、古墳時代の遺構及び堆積層からは緑泥石製紡錘車・勾玉・管玉・臼玉・

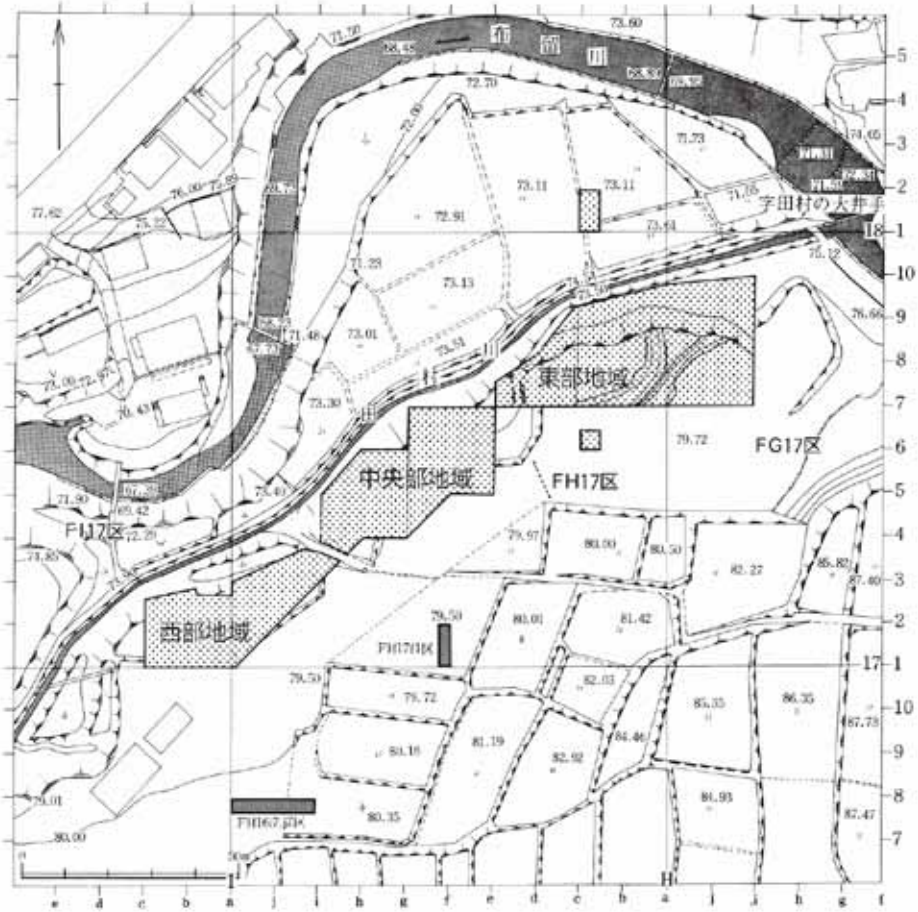


図 10　布留 (西小路) 地区調査区

剣形石製品などが製塩土器などと共に出土した。製塩土器は約 3,000 点あり、内陸部での大量の製塩土器の出土は注目される。

古墳時代の遺物包含層の上層では鎌倉時代の遺構が認められた。遺構には柱穴・土坑などがある。土坑は人頭大の河原石を敷き詰めたものが 2 基検出された。3 × 4m の方形で、瓦器椀、鉄釘などが出土しており、鎌倉時代の木棺墓と考えられた。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　1996『布留遺跡布留 (西小路) 地区　古墳時代の遺構と遺物 1976.9 ～ 1977.3』考古学調査研究中間報告 19

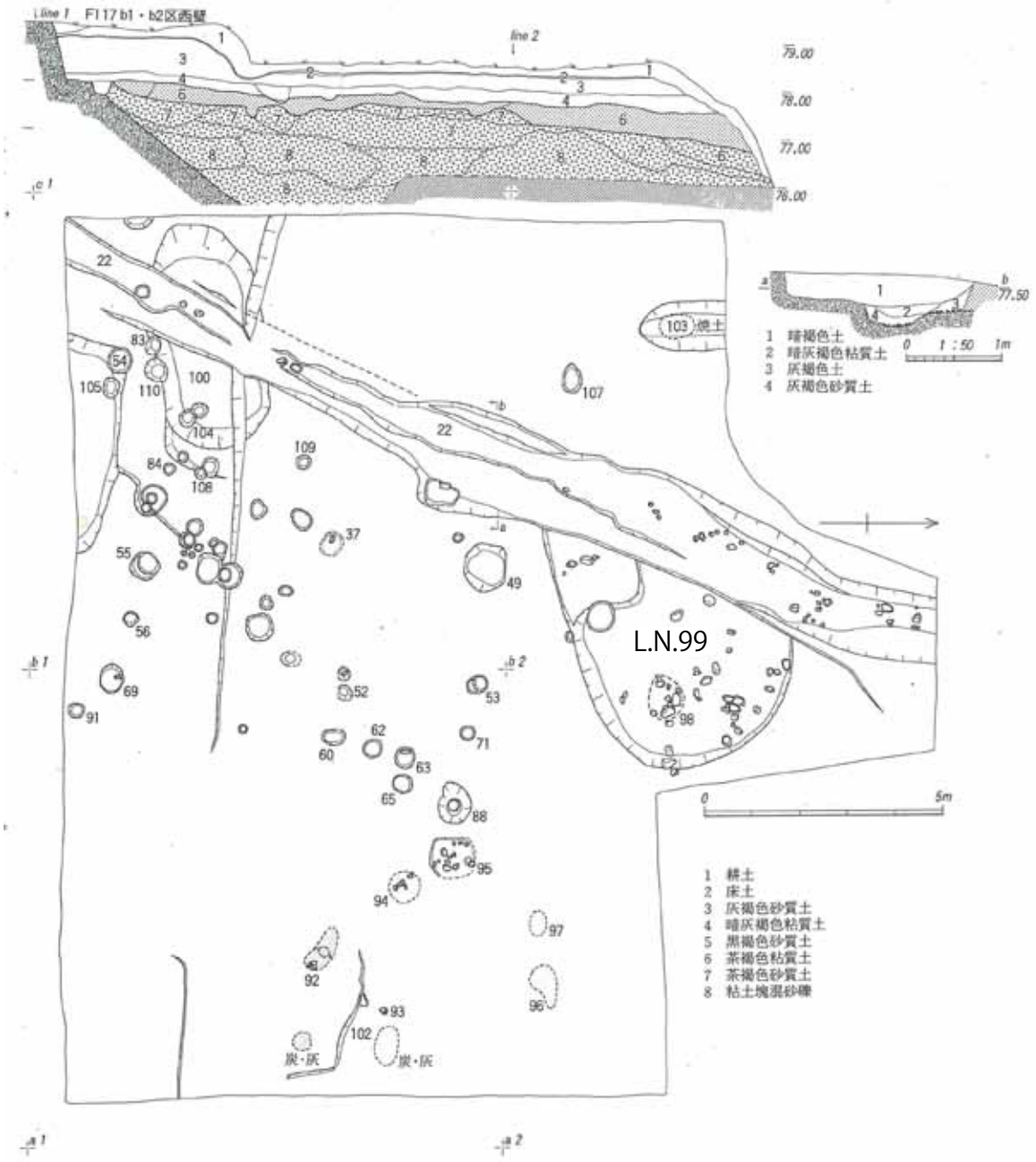


図 11　西部地域東半調査区の大型土坑 (L.N.99)

図 12
東部地域土坑 (L.N.43) 韓式系鍋出土状況

図 13　西部地域土坑 (L.N.22) 土師器甕出土状況

図 14　西部地域土坑 (L.N.99) 出土須恵器・土師器・製塩土器・玉類　5 世紀

6）第 15 次：三島 (里中) 地区（1978 ～ 79 年）

三島 (里中) 地区は布留川の北岸地域に位置する。布留川より分流した流路が何時期にもわたって流れを変えて堆積した氾濫原で、1978 年 10 月～ 1981 年 4 月に西地区、東地区に分けて順に調査は実施された。検出された古墳時代の遺構は井戸のみであった。ほかには古墳時代と奈良時代の自然流路や近世の遺構が検出されただけである。古墳時代の流路は幅約 10m あり、東西両地区で確認されたので、同一の流路の上流と下流と判断された。

古墳時代の流路からは古墳時代前期から後期にいたる多量の土師器、須恵器、木器などのほか、滑石製玉類や鉄滓なども出土し

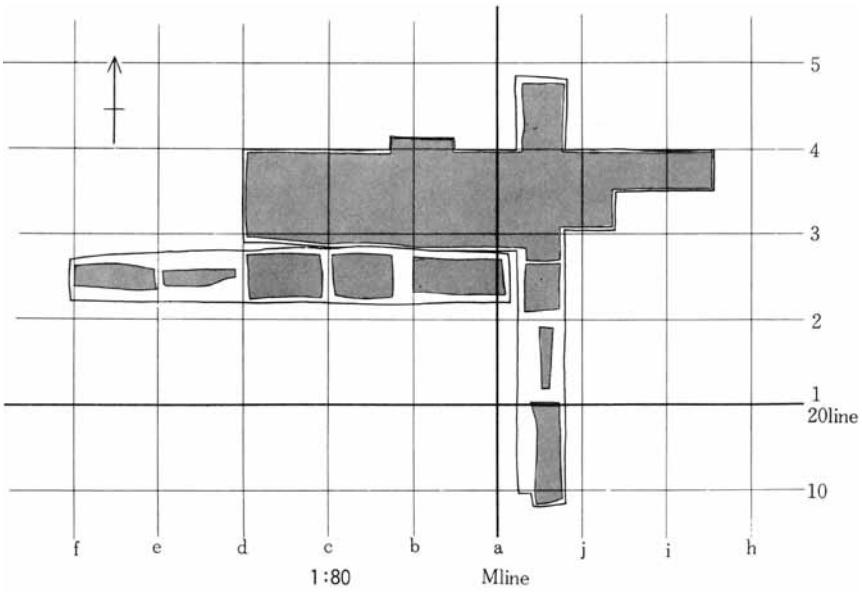


図 15　西地区の発掘調査地

図 16　西地区の発掘風景　　西より

ており、近辺に活発な人びとの営みがあったことが分かる。

出土した木製品は刀剣装具、紡織具、農具、容器、楽器、祭祀具、建築用具など多種にわたる。

その中でも注目されるのは、多数の木製刀剣装具類で 60 点以上が出土した。これは木で作られた刀や剣の把と呼ばれる握りの部分や鞘及びその付属具などである。中には未製品の鞘口が見られ、付近でこうした武器類が生産されていたことが明らかとなった。これらの多くが流路からの出土であるため、出土した層位からの時期の限定は難しいが、概ね古墳時代中～後期のものであると考えられている。このほか、楽器では琴、琴柱がある。琴はヒノキの板で作られていて、

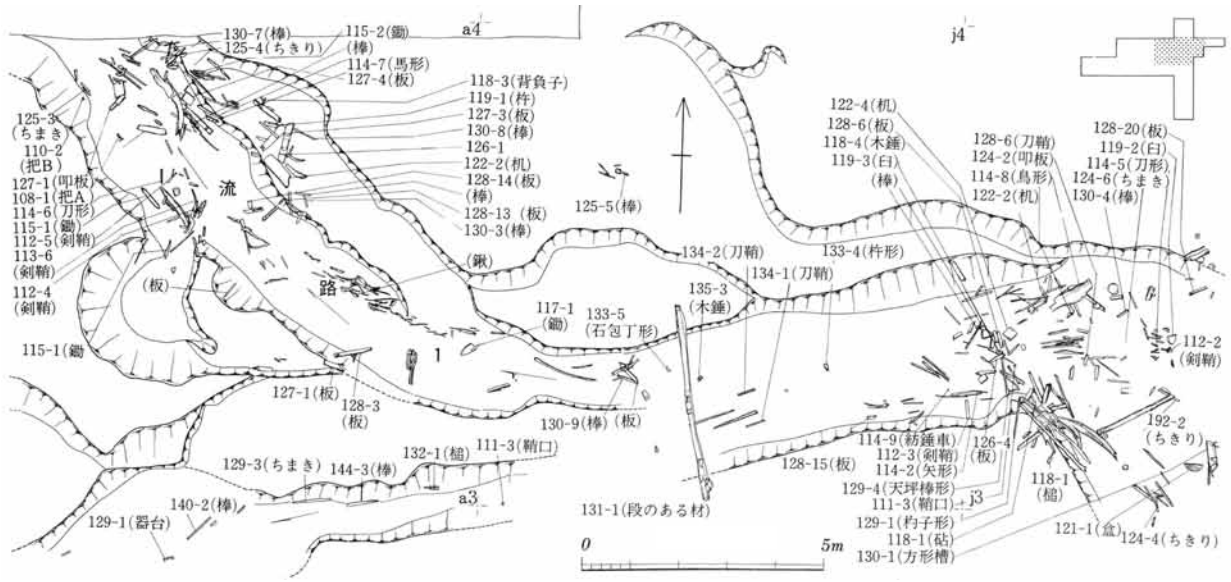


図 17　西地区流路 1 の木器出土状況

図 18　西地区で見つかった流路跡　東より

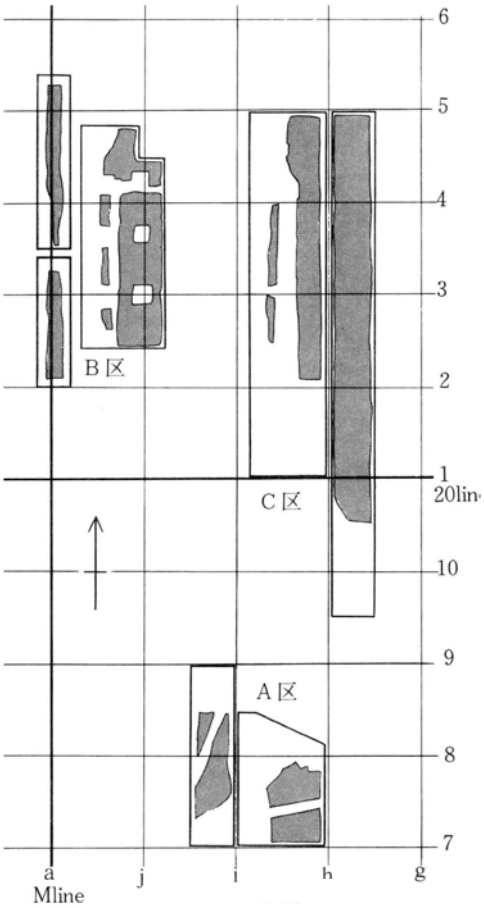


図 19　東地区の発掘調査区

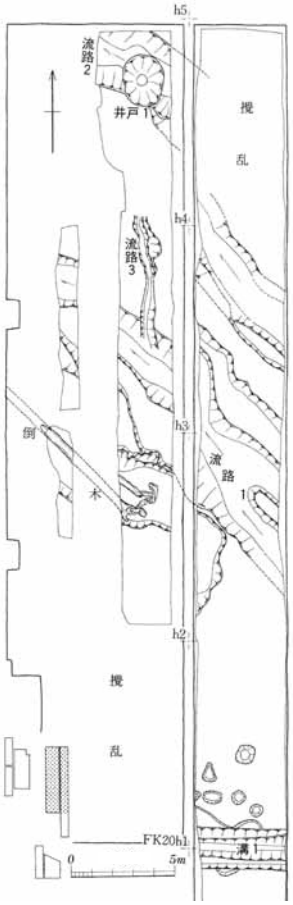


図 20
C 地区古墳時代遺構平面図

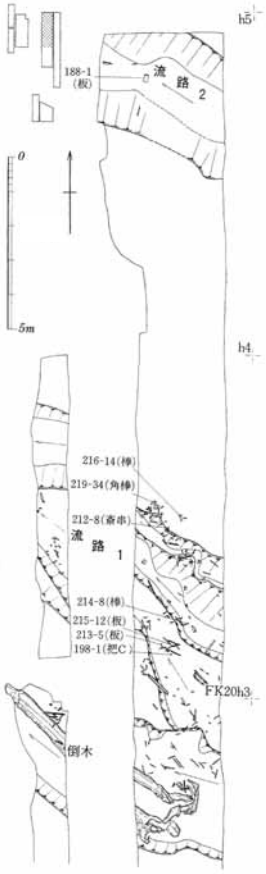


図 21
流路 1 木器出土状況

図 22　木製漆塗り把縁

図 23　流路ほか出土把

図 24　流路ほか出土刀剣装具

図 25　流路ほか出土木製祭祀具

長さ 45.4cm、厚さ 1.2cm のものである。一端に 6 本の糸をかける突起があり、他方には一孔が開けられている。

両地区から出土した木製品はそれまであまりよく分かっていなかった古墳時代の生活を考える上で重要な資料となっている。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　1995『奈良県天理市布留遺跡三島 (里中) 地区発掘調査報告書－天理教神殿東・西礼拝場地区の発掘調査－』

7）第 16 次：守目堂 (ツルクビ) 地区（1982 ～ 83 年）

調査地は布留川の南岸を西に延びる低丘陵上に位置する。現在は削平されて見られないが、かつて存在した鑵子山のすぐ西に当たる。1982 年 9 月～ 1983 年 2 月に 3,565 ㎡が調査された。

調査対象地の大半はツルクビ池（旧守目堂池）に当たっていたため、調査は池の堤の部分を対象として行われた。調査の結果、弥生時代から近世に及ぶ各時期の遺構が検出された。

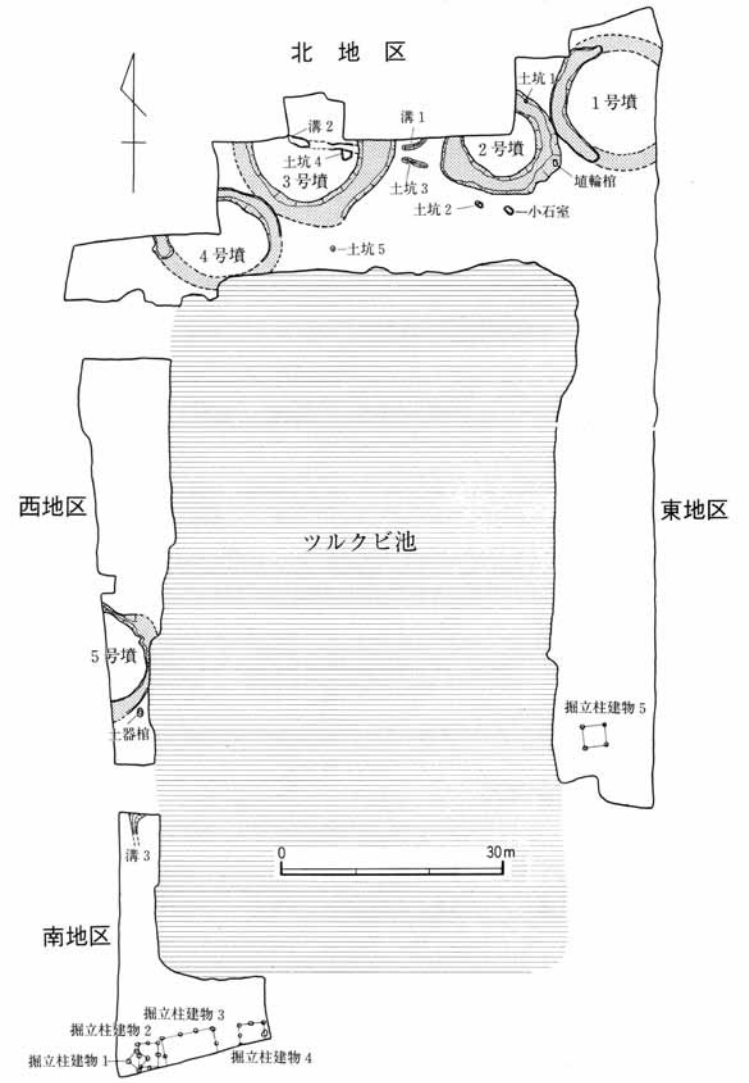


図 26　古墳時代の遺構平面図

弥生時代の遺構には、溝 2 条と土坑数基がある。いずれも弥生時代後期のものである。

古墳時代の遺構には円墳 5 基、埴輪棺 1 基、小石室 1 基、土器棺 1 基、掘立柱建物 5 棟、そのほかに溝がある。

古墳は調査区の北側で、東西に並んで 4 基 (1 号墳～ 4 号墳)、西側で 1 基 (5 号墳) 検出された。墳丘はいずれも中世の段階に削平されており、周溝だけが残ったものである。従って、主体部については明らかでないが、恐らく木棺を直葬したものと推定される。

埴輪棺は 2 号墳の周溝内で検出された。墓壙内に 2 個の円筒埴輪の口を合わせるようにして据えたもので、小口や継目はほかの埴輪片で覆っていた。

小石室は 2 号墳のやや南に離れたところで検出された。人頭大の石を積み上げたもので、長さ 80cm、幅 40cm ある。

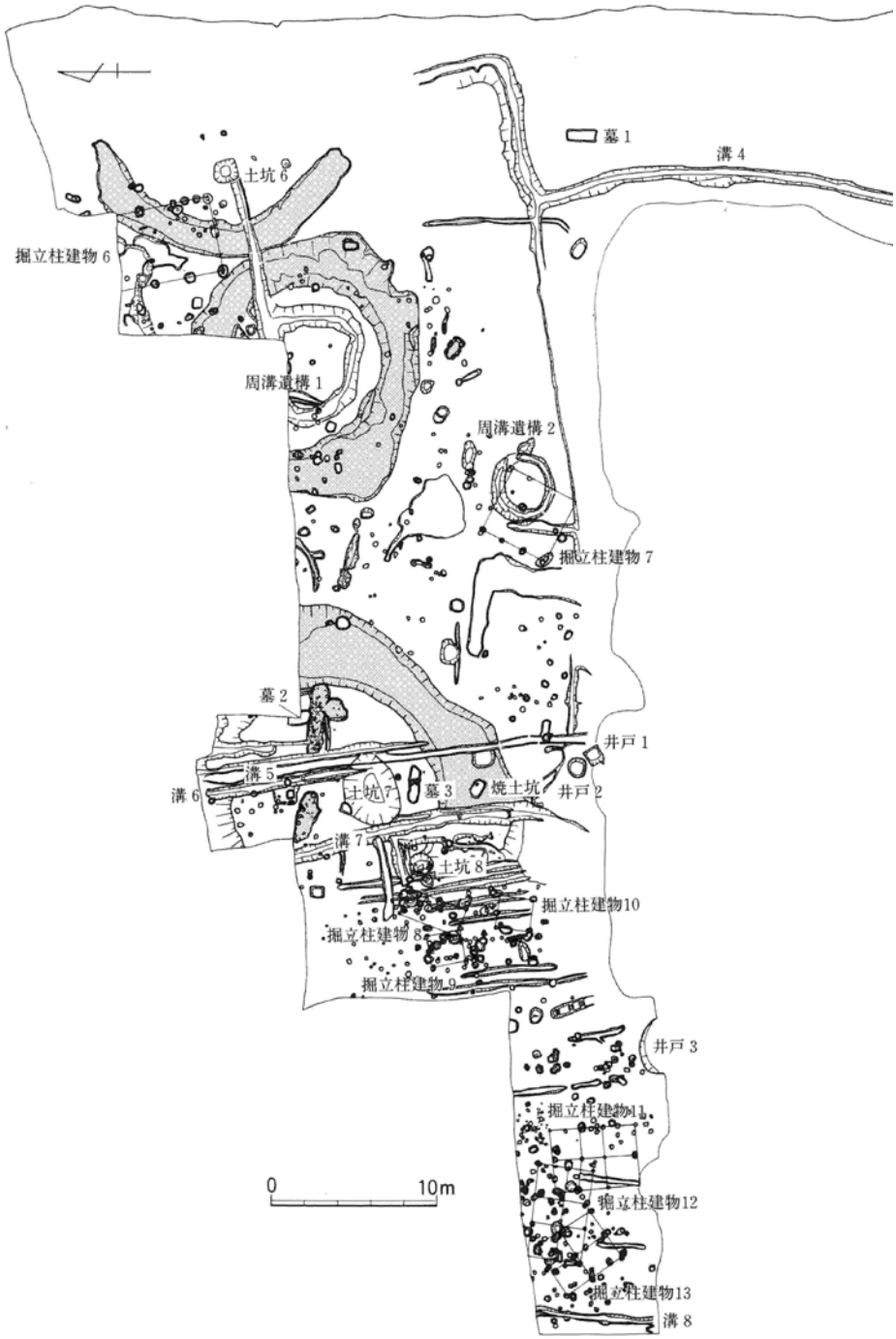


図 27　北地区遺構平面図

副葬品などは検出されなかった。恐らく２号墳に付随した埋葬施設だと考えられる。

５号墳では、周溝に接するような形で須恵器の大甕を利用した土器棺が出土した。古墳の築造時期は出土した須恵器などから５世紀末頃と考えられる。

掘立柱建物は、調査区の南で検出された。１間×１間の建物２棟、１間×２間以上１棟、３間×２間以上１棟、２間×２間以上が１棟である。古墳時代後期のものと思われる。

中近世の遺構には、柱穴、溝、土坑、井戸、土壙墓がある。土壙墓のうちの１基は 1.8m × 0.7m あって、棺内には中国製の白磁椀２点と鉄刀１振を副葬していた。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　1999『奈良県天理市　布留遺跡守目堂（ツルクビ）地区・守目堂（鑵子山）地区発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告 20

8）第 17 次：布留（堂垣内）地区（1983 ～ 1985 年）

調査地点は布留（堂垣内）地区（1954）の東に隣接する。1939 年に縄文時代の遺物包含層が確認され「天理式」と名付けられたところと同一地点である。1983 年 4 月～ 1983 年 12 月、1984 年 12 月～ 1985 年 2 月に 2,874 ㎡が調査された。

上層では中世の耕作溝が、下層では古墳時代と縄文時代の遺構が検出された。

遺跡の北半部は細粒堆積物が広がり縄文時代中期末から後期初頭の貯蔵穴・石囲い炉・竪穴建物跡・土坑などの遺構がある。

貯蔵穴は 3 基あり、径約 1 ～ 2 m のほぼ円形を呈し、深さは 0.6 ～ 0.9m ある。そのうちの 1 基は、2 段掘りで中央下部に平石が置かれている。

竪穴建物跡は、2.8m × 3.3m の楕円形を呈し、その中央からやや北西寄りに石囲い炉がある。その南寄りには、深鉢形土器が据えられる。竪穴建物跡に接する北東側には、2 × 4m の範囲に焼土塊が多数見られ、大きなもので 20cm あり一面は比較的平滑で反対面は枝や草状の圧痕を残し、壁体状を呈する。土坑は皿状で上位に平石を置くものがある。また、土坑の一つからは、硬玉大珠が出土した。調査地の中央には、西行する縄文時代の小流路があり、中期から

図 28　縄文時代中期末の竪穴建物　東より

図 29　縄文時代中期末の深鉢出土状況

後期の遺物を包含する。

南半分は粗粒堆積物が分布し、古墳時代の竪穴建物跡・掘立柱建物・井戸・土坑・流路が検出された。

竪穴建物跡は、前期のもの２棟、中期のもの３棟がある。

庄内式期の竪穴建物跡は、一辺約７ｍの方形プランで、４基の柱穴と中央に炉跡を持ち、通有の例より大きいのが特徴である。

古墳時代の流路は２本あり、一つは調査地の中央を西行し弥生時代後期から古墳時代初頭のほぼ完形の土器を多数含む。もう一つは、南側を北西行する中期の流路で、その北岸では、高杯、小型壺、甕が一括投棄された状況がいくつか認められた。また、滑石製勾玉・管玉・臼玉、水晶製丸玉、ガラス製小玉、碧玉製管玉なども出土しているところから、祭祀用具が投棄されたものと見られている。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　1991『発掘調査 20 年』

図 30　古墳時代前期の竪穴建物　北より

9）第 19 次：豊井 (宇久保) 地区（1984 年）

調査地は布留川の北約 400m に位置する。周辺の地形は西に緩やかに傾斜し、北には布留川の支流である豊井川が西流する。埴輪群が発見された布留 (アラケ) 地区からは北東に 300m の地点に当たる。1984 年 8 月～ 11 月に 1,680 ㎡が調査された。ここでは南北 2 地区の調査が行われている。

南地区は古墳時代中期から奈良・平安時代の遺物を多量に含む氾濫原となっていて遺構は検出されなかった。北地区では古墳時代の掘立柱建物・井戸・祭祀遺物一括投棄場、奈良・平安時代の掘立柱建物、中世の濠などが発見されている。

祭祀遺物一括投棄場は自然河道の北岸にあり、遺物の出土状況から、北側の高い位置から河道に向かって祭りの道具を一括投棄したものと考えられている。遺物の広がりは一部削平された可能性もあるが、直径 1.3m 程であった。ここからは滑石製勾玉 1 点・同管玉 2 点・同臼玉 789 点・同有孔円板 4 点･同剣形 1 点 , 鉄製小型鍬先形 2 点 , 鉄鎌 1 点､土師器高杯 67 点以上･同小型壺 2 点･同甕 1 点・須恵器甕 1 点などが出土している。

古墳時代の掘立柱建物は可能性のあるものも含めると 6 棟ある。そのうち掘立柱建物 1 は 3 間 × 2 間以上の大型の柱穴掘形を持つ井建物である。

中世の濠は東西方向のものが 10m の距離を隔てて 2 条検出されている。北側のものは長さ

図 31　祭祀遺物が一括投棄された古墳時代流路と掘立柱建物　西より

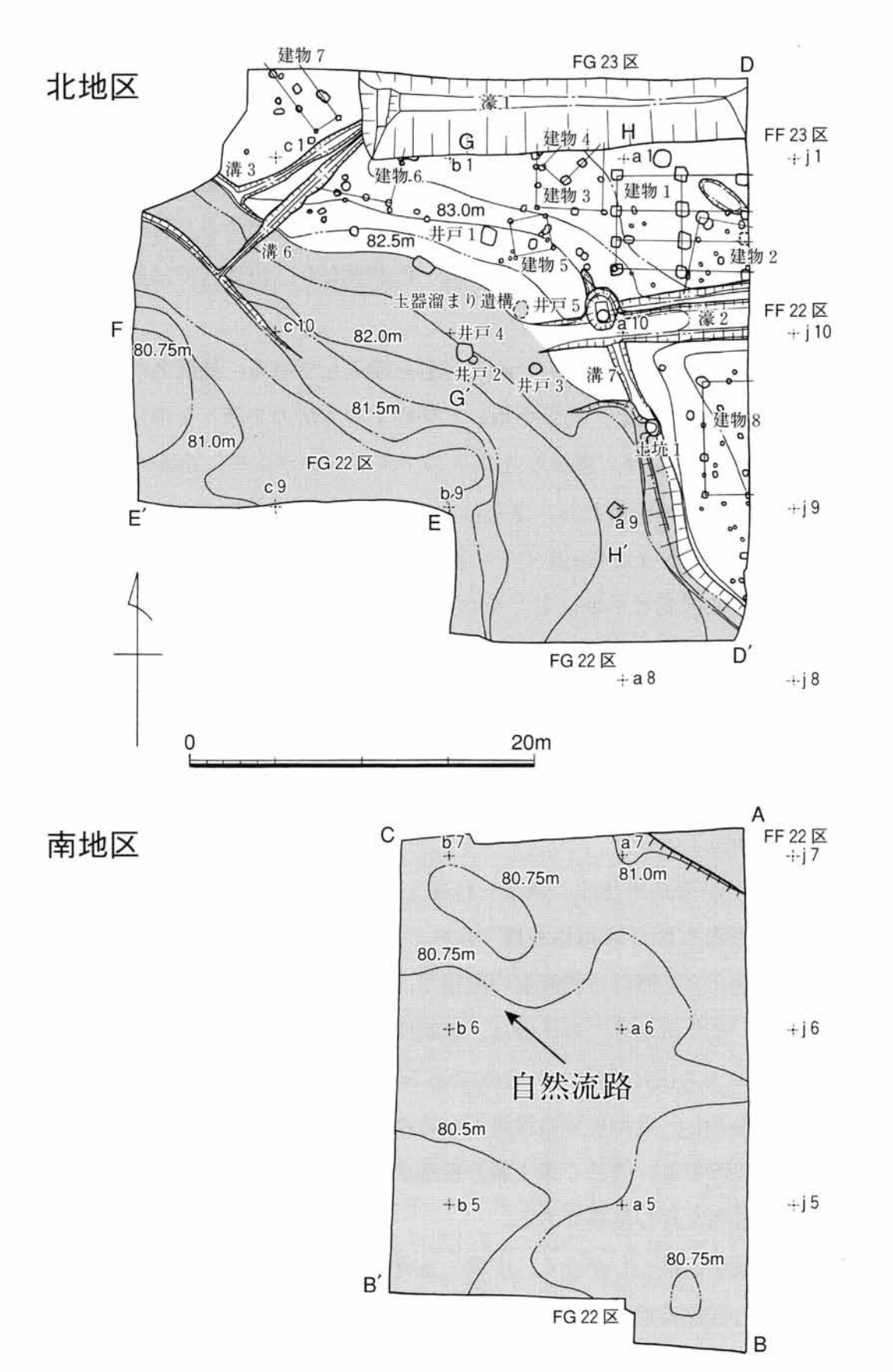

北地区
建物 7
FG 23 区
D
濠 1
G
H
建物 4
FF 23 区
j 1
c 1
溝 3
b 1
a 1
建物 6
建物 3
建物 1
83.0m
井戸 1
82.5m
溝 6
建物 5
建物 2
土器溜まり遺構
井戸 5
FF 22 区
j 10
F
c 10
82.0m
井戸 4
a 10
濠 2
80.75m
井戸 2
井戸 3
溝 7
G′
81.5m
建物 8
81.0m
土坑 1
FG 22 区
c 9
b 9
j 9
E′
E
a 9
H′
FG 22 区
D′
a 8
j 8
0
20m
南地区
A
C
b 7
a 7
FF 22 区
j 7
80.75m
81.0m
80.75m
b 6
a 6
j 6
自然流路
80.5m
b 5
a 5
j 5
80.75m
B′
FG 22 区
B

図 32　最終遺構平面図

図 33　祭祀遺物一括投棄場遺物出土状況

22m 以上、幅 4.5m 以上、深さ 2.3m あり、濠内には暗青色粘土が堆積していたことから、滞水していたことが分かる。その西端には南西に延びる 4 時期にわたる暗渠排水溝がある。南側の濠の大きさは長さ 22m 以上、幅 3.9m、深さ 1.6m あり、これらは屋敷を防御するためのものと考えられている。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　2006『奈良県天理市　布留遺跡豊井（宇久保）地区発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告 24

図 34　祭祀遺物一括投棄場出土遺物　5 世紀

10）第 22 次：三島 (木寺) 地区（1985 ～ 86 年）

調査地は扇状地の扇端付近の標高 66m の地点にあり、布留遺跡の西端に位置する。地形は緩やかに北西に傾斜する。1985 年 10 月～ 1986 年 1 月に 572 ㎡が調査された。

調査の結果、縄文時代晩期と中世の遺構が確認された。

縄文時代晩期の遺構には土坑、焼土坑、溝状遺構、貯蔵穴のほか、自然の流路がある。中世の

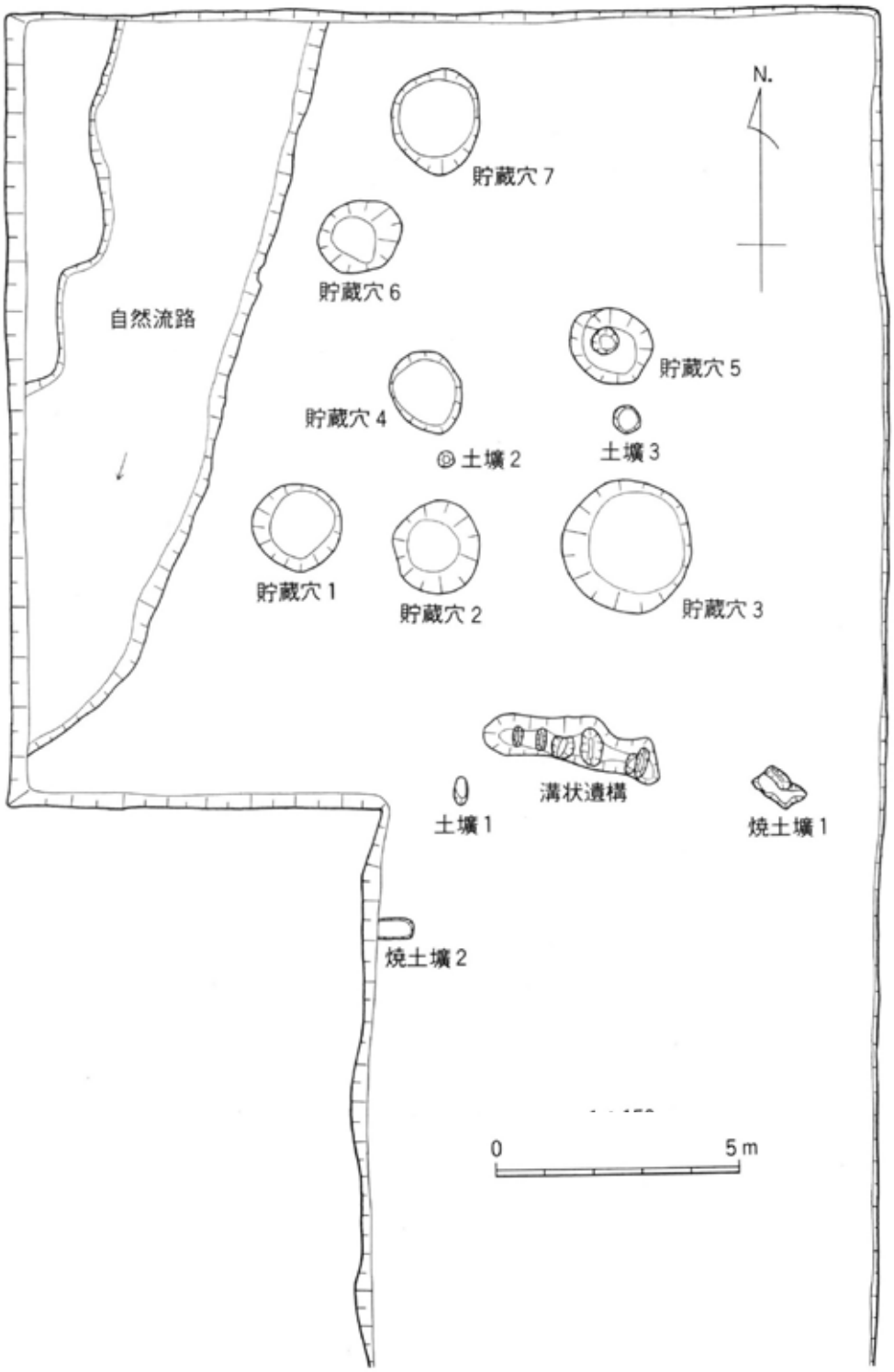


図 35　縄文時代晩期の遺構平面図

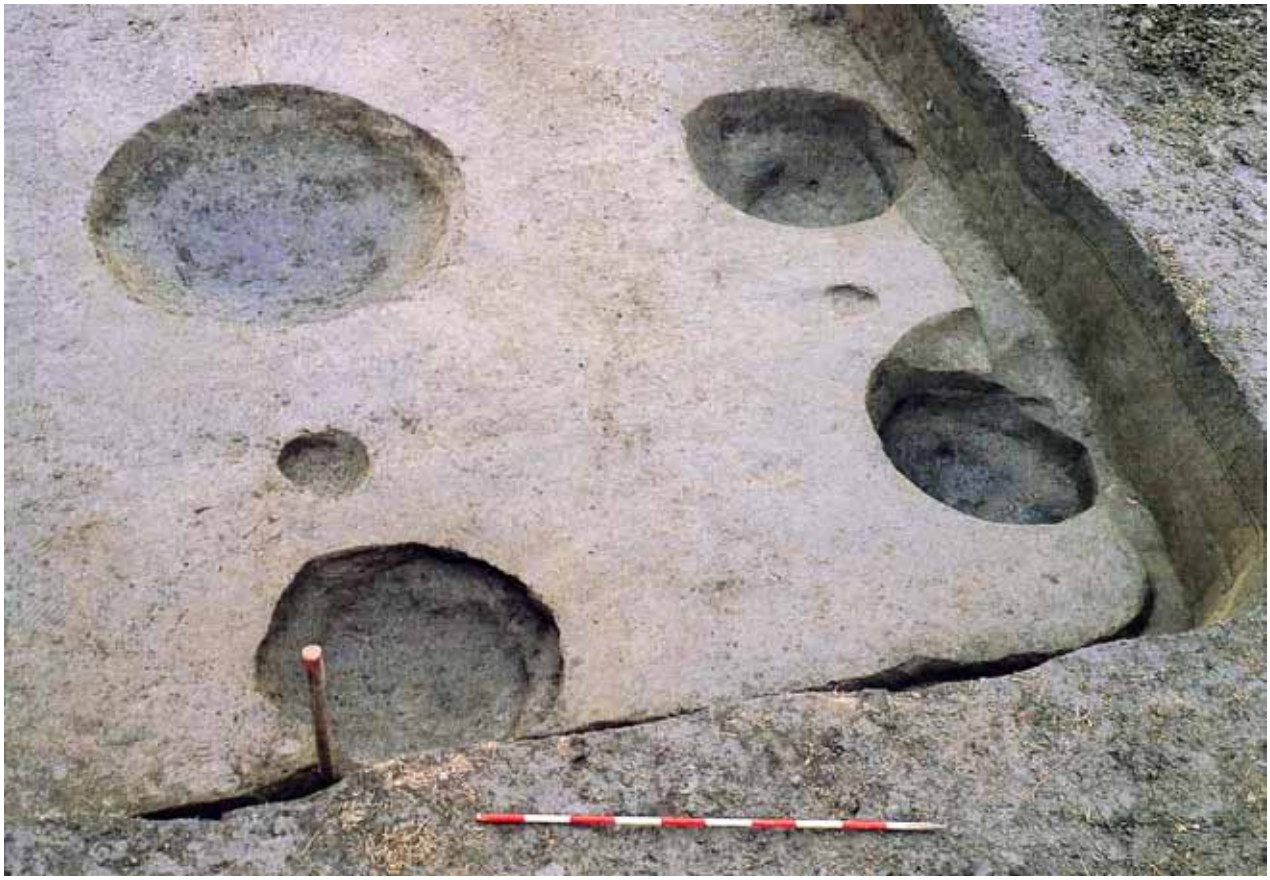


図 36　縄文時代晩期の貯蔵穴群　南より

遺構は素掘溝である。

貯蔵穴と見られるものは 7 基あり、平面形はほぼ円形を呈する。埋土中から出土した堅果類や、穴の形態から食用ドングリの貯蔵穴と考えられている。直径は 180cm 内外のものが多いが、貯蔵穴 3 は直径 273cm もある大型である。深さは平均 60cm である。断面形は逆台形を呈するものが多く、方形、皿形のものもある。貯蔵穴内の埋土は粘質が強く、中に水が溜まっていたと考えられる。また、貯蔵穴の中には、後の掘り込みが認められるものもあることから、使用は一度だけではなかったと考えられている。

縄文時代の遺構からは滋賀里 II 式・III 式と呼ばれる型式の特徴を備えた縄文時代晩期の土器のほか、サヌカイト製の石鏃、石錐、削器などが出土した。また、貯蔵穴から、カシ、クヌギなどの堅果類が多数出土した。

今回の調査で布留遺跡で初めて縄文時代晩期の遺構が確認された。さらに、ドングリの貯蔵穴は近畿地方でも類例が少なく、貴重な発見であった。花粉分析などから、この時期の布留遺跡はカシなどの照葉樹林で覆われていたことが判明している。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　1989『奈良県天理市布留遺跡三島 (木寺) 地区・豊田 (三反田) 地区発掘調査報告』考古学調査研究中間報告 16

11）第 23 次：杣之内 (赤坂) 地区（1987 年）

調査地は布留遺跡の南端に当たり、石上神宮からは南西に 500m 離れた独立丘陵上に位置する。豪族居館や大型倉庫が発見された杣之内 (樋ノ下・ドウドウ) 地区からは約 150m の浅い谷を隔てた地点である。丘陵は北側と西側が削平され崖状をなすが、現状では長さ 100m、幅 40m 程の大きさで、標高は 87 ～ 92.5m である。1987 年 3 月～ 10 月に 2,100 ㎡が調査された。

発掘調査に先立つ踏査では、明らかに古墳の墳丘と推定されるような古墳状の隆起は認められず、数点の須恵器・土師器を表採したのみであった。

しかし、調査の結果、この小高い丘に古墳時代中期末から後期にかけて小規模な 20 基余りの古墳が密集して築かれていることが判明した。また、古墳時代後期から中世にかけての木棺墓や土壙墓が 12 基、縄文時代早期の土坑 2 基が検出された。

この地区は従来、古墳が確認されていなかったが、今回の多数の古墳の発見により、守目堂 (ツルクビ) 地区の古墳群と共に、集落周辺における初期の群集墳の出現を考える上で注目される。

古墳は直径または一辺が 7 ～ 12m の円墳・方墳である。築造時期は 5 世紀末から 6 世紀後半

図 37　杣之内 (赤坂) 地区の全景　南西上空より

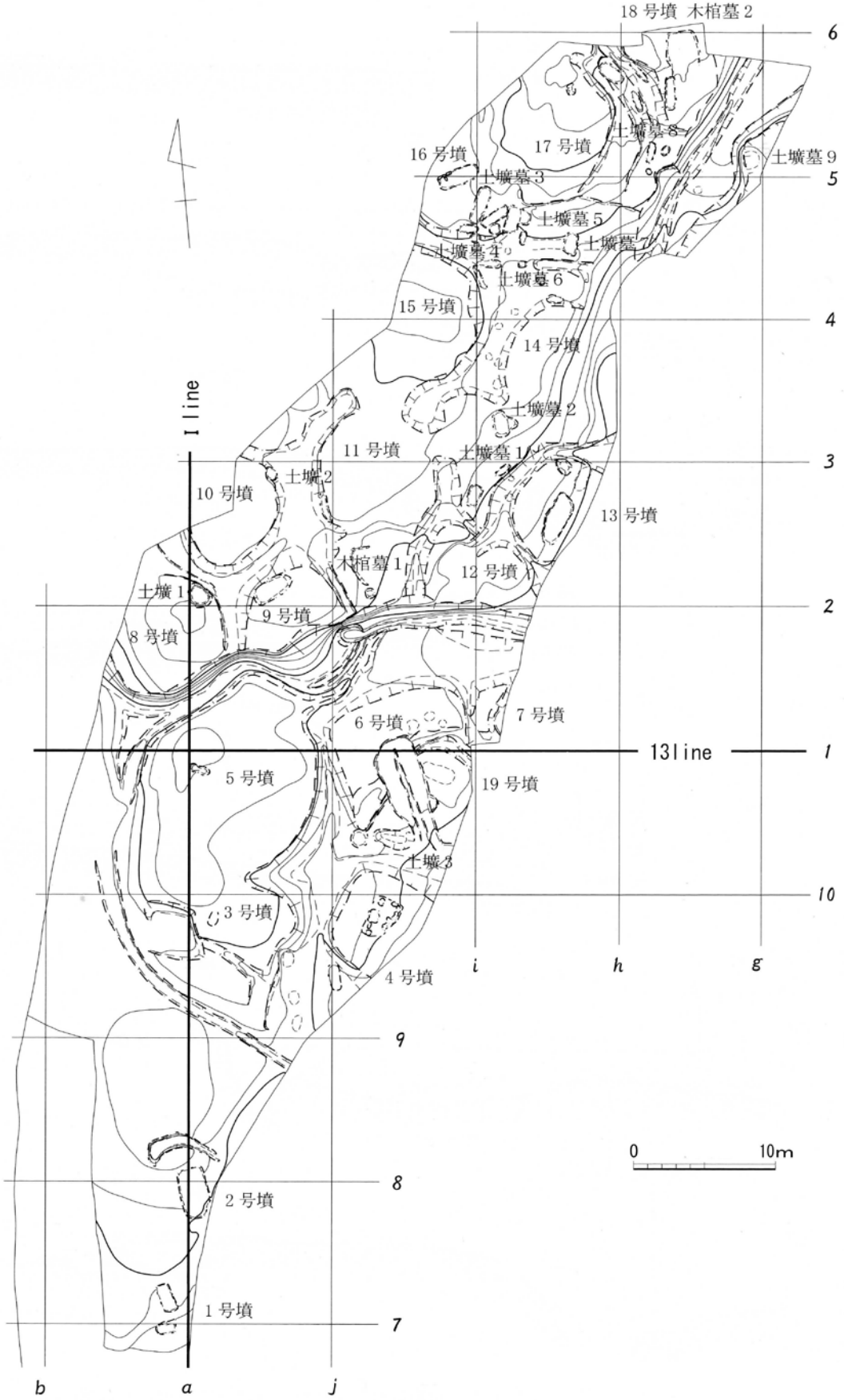


図 38　杣之内（赤坂）地区遺構平面図

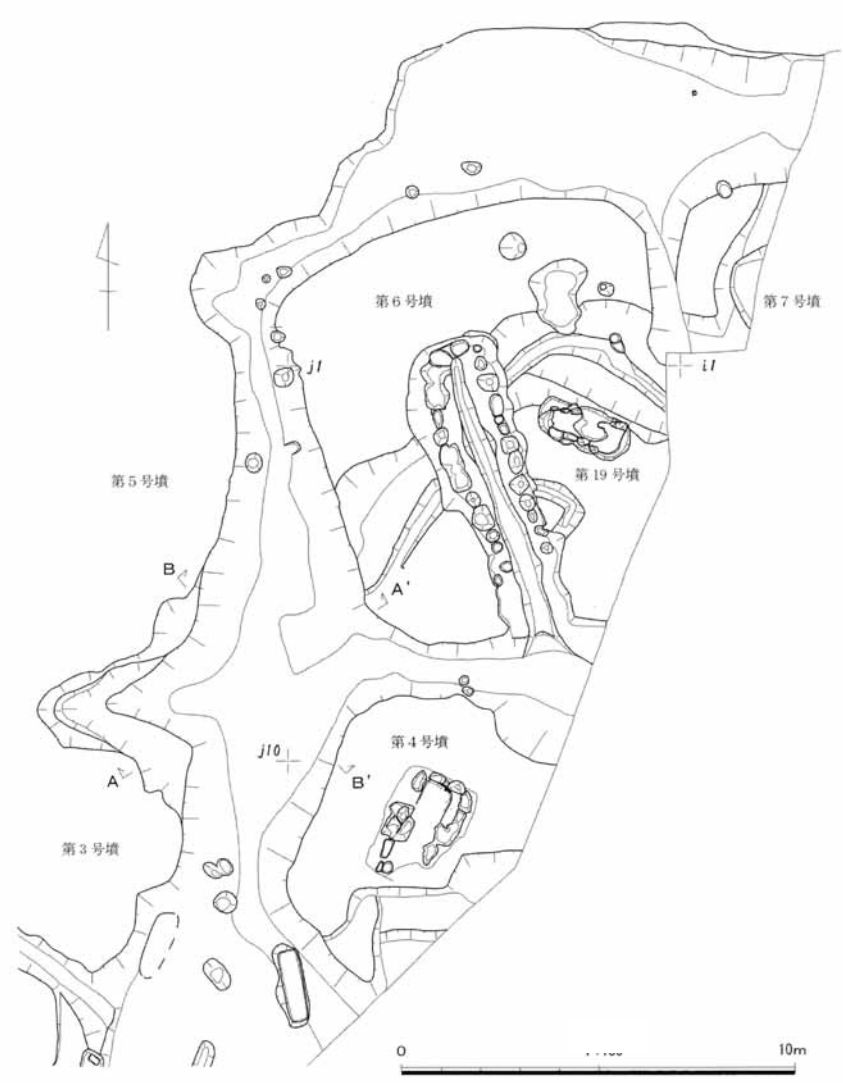


図 39　赤坂 3 ～ 7・19 号墳平面図

で、7 世紀前半まで追葬が見られる。主体部は横穴式石室と木棺直葬がある。限られた狭い面積の中で、周溝を隣の古墳と共有させながら 100 年余り造墓されているところから、同一集団の累代の墓域と見られる。第 4 号墳は一辺約 7 m の方墳で、周溝から鰭付円筒埴輪が倒れ込んだ状態で検出された。この埴輪は西山古墳のものと酷似している。また、同じ場所に新たに古墳を作りかえているもの (第 19 号墳と第 6 号墳) もある。第 2・6・9・18 号墳の石室内及び周溝内からは鉄滓が出土しており、被葬者の性格を示唆している。また、第 14 号墳出土の韓式系の甕には、外面に鳥足文のタタキが見られ、百済系の渡来人との関わりを示唆している。

このほか、土坑 3 からは縄文時代早期の完形の深鉢が出土している。あるいは墓とも見られるが、この時期の遺構が布留川南岸で検出されたのは初めてであり、周辺にも同様な遺構の広がる可能性がある。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　2010『布留遺跡　杣之内 (赤坂・北池) 地区発掘調査報告書　1987.3 ～ 1988.2』考古学調査研究中間報告 22

12）第 24 次：杣之内 (北池) 地区（1987 ～ 88 年）

杣之内 (北池) 地区は布留川の南 600m に位置し、その北側には 1987 年に調査の行われた杣之内 (赤坂) 地区の丘陵がある。この丘陵では 20 基程の古墳が検出されていたので、北池地区においても古墳の存在する可能性が十分予測された。調査地の大半は北池と呼ばれる池に当たっているため、調査はその堤を対象として行われた。調査区は丘陵の南斜面に当たる北地区とその南の谷部の南地区に分け、1987 年 10 月～ 1988 年 2 月に 1,150 ㎡を調査した。

調査の結果、南地区から弥生時代後期から古墳時代前半にかけての土坑 1 基、古墳時代前期の

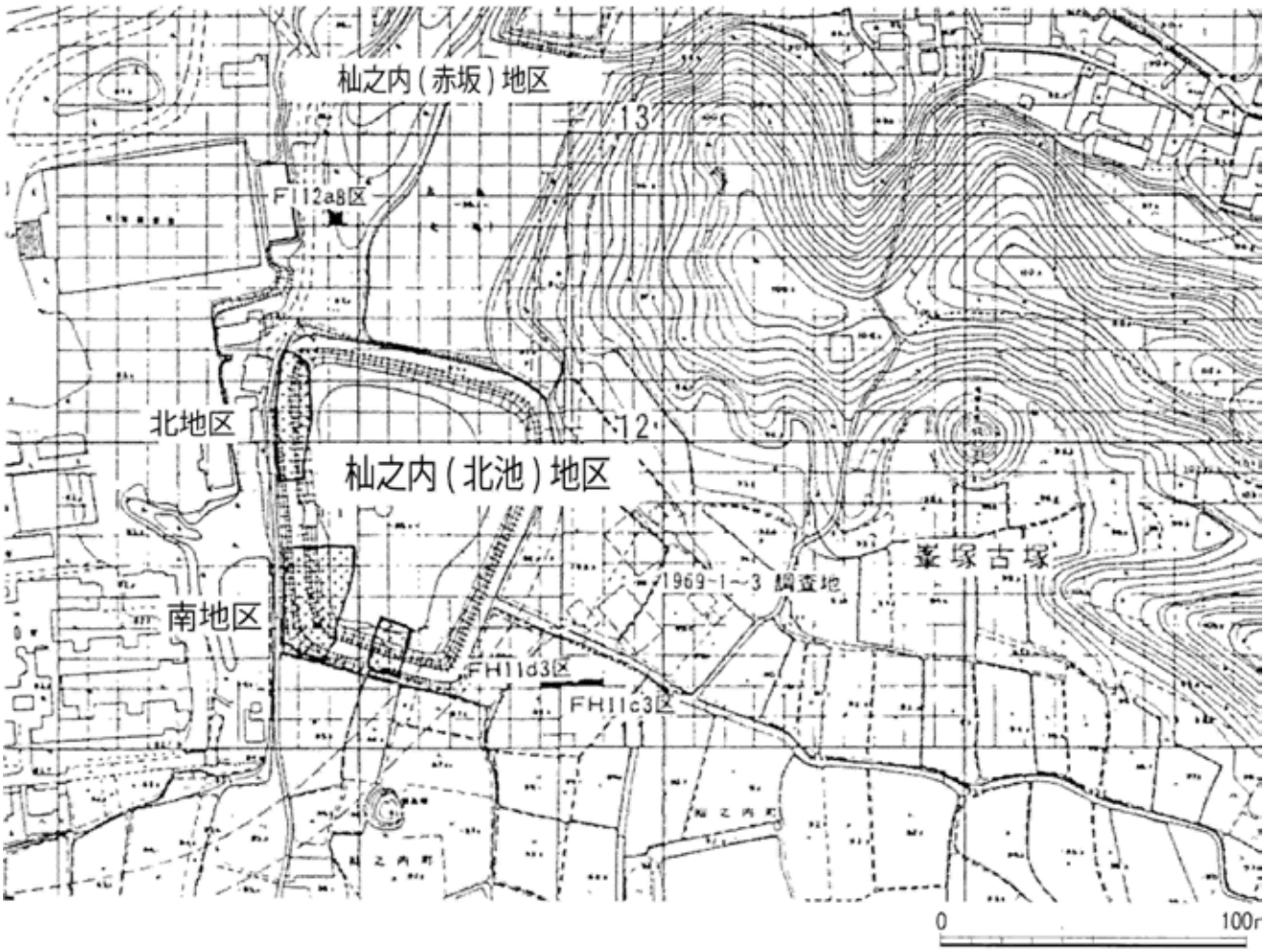


図 40　調査区位置図

竪穴建物 1 棟、流路 1 条、溝約 20 条、柱穴約 50 基が検出された。

土坑は長さ約 8 m、幅約 5 m の規模のものである。深さは約 1.2m で、湧水点まで掘り抜いており、西で流路と繋がっている。土坑からは多量の土器のほか、自然木に混じって農耕具・鞘・棒・板などの木製品が約 50 点出土した。その中には、焼け焦げたものも含まれていた。また、土坑の外ではあるが南東の肩付近からは銅鐸形土製品が出土した。

図 41　弥生時代土坑内木器出土状況　北より

竪穴建物は一辺約 4.5m の隅丸方形で、内部に浅い周溝を巡らす。炉や柱穴などは検出されなかった。建物内からは土師器高杯・製塩土器が出土した。

北地区からは、当初の予想通り古墳が検出された。そのほかには土壙墓が 1 基見つかった。

古墳は南北に主軸をおく、前方後円墳である。墳丘は後世に削平を受け基底部のみが残った

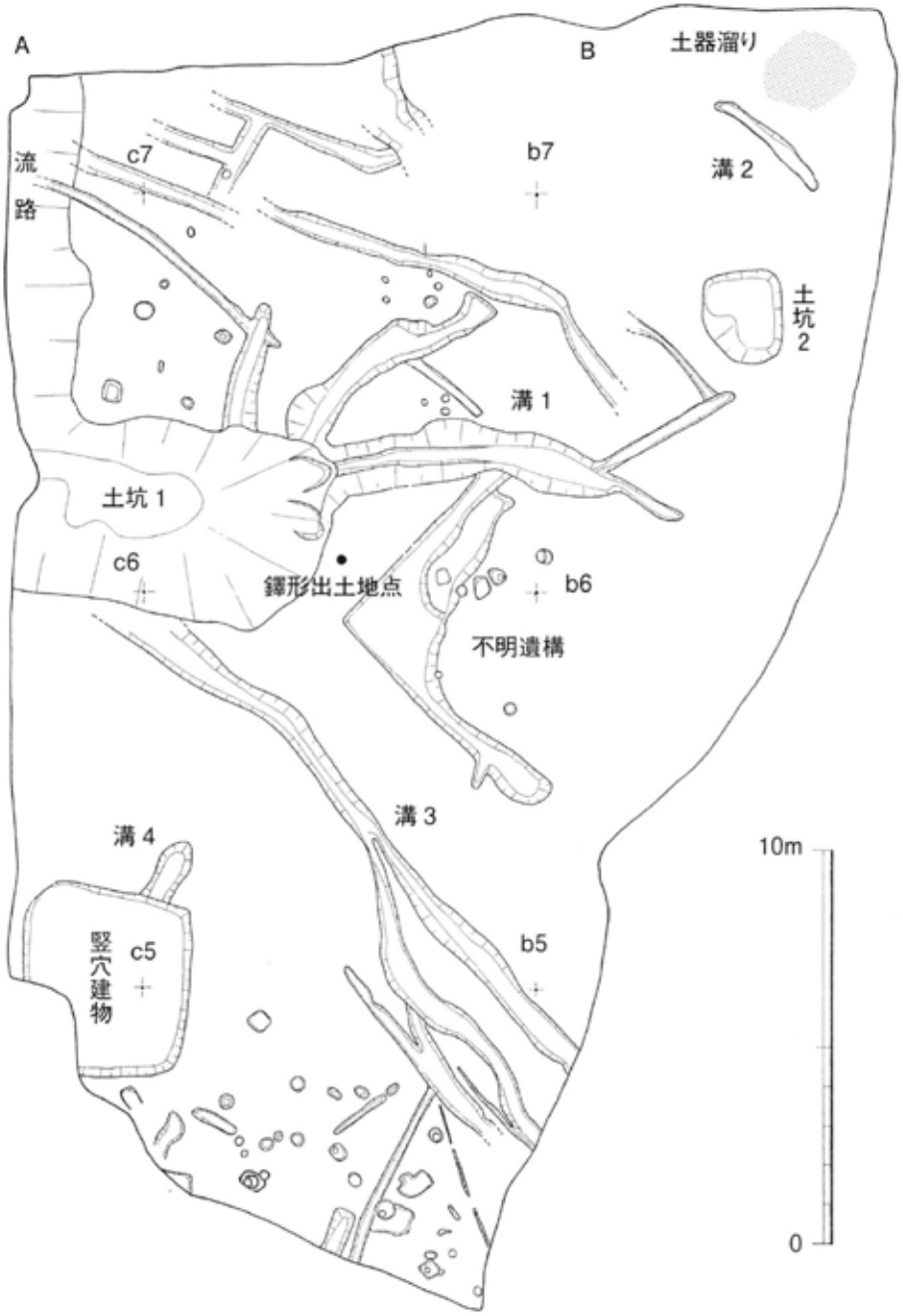


図 42　南地区遺構平面図

ものである。周囲には幅 3 ～ 4 m の濠かと思われる窪みが巡る。後円部の西半分と前方部の大半は調査区外にあるため、全長を直接知ることはできないが、後円部の復元径から考えると、全長は 30m 足らずの小型の前方後円墳であったことが分かる。濠からは円筒埴輪・形象埴輪の細片が多く出土した。形象埴輪には馬形埴輪がある。そのほかの出土品には、須恵器片、滑石製紡錘車がある。5 世紀末から 6 世紀初頭の古墳と考えられている。この前方後円墳は赤坂地区で検出された群集墳と一連のもので、規模と形からその盟主的存在であったとみることができる。

土壙墓は古墳の南端で検出した。長さ 1.8m、幅 0.45m の隅丸長方形を呈する奈良時代のものである。掘り方の両端には土師器の甕が口縁部を向い合うように横向きに据えられていた。

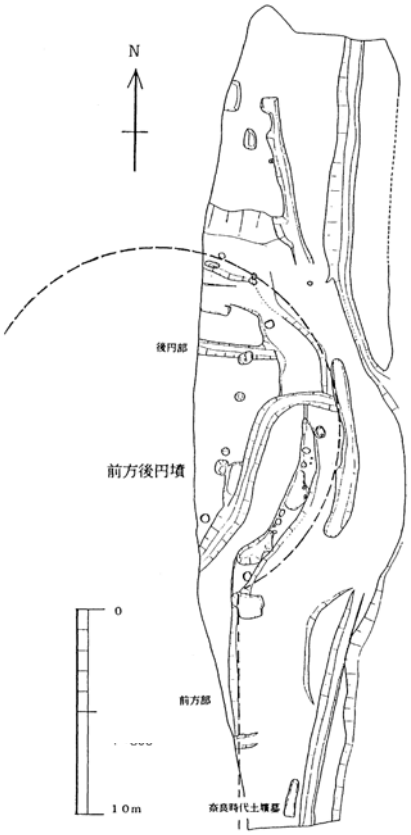


図 43　北地区遺構平面図

【文献】
埋蔵文化財天理教調査団　2010『布留遺跡　杣之内（赤坂・北池）地区発掘調査報告書　1987.3 ～ 1988.2』考古学調査研究中間報告 22

13）第 27 次：杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区（1988 ～ 89 年）

調査地は布留川南岸の河岸段丘上に位置する。付近の標高は 80 ～ 82m である。調査は 2 次に分けて実施された。1 次調査は 1980 年 1 月～ 4 月・2 次調査は 1988 年 9 月～ 1989 年 8 月に行われた。調査面積は 5,600 ㎡である。

第 1 次調査では溝 5 条、井戸 1 基、土坑 2 基、柱穴約 450 基などの遺構が検出された。第 2 次調査は第 1 次調査区を含む形で行われ、第 1 次調査区で検出された遺構のほかに溝 3 条、流路 1 条、井戸 2 基、土坑 5 基、竪穴建物 17 棟、柱穴約 1,200 基が検出された。

主要な遺構には『日本書紀』に見られる「石上溝」ではな

図 44　北地区の前方後円墳　東より

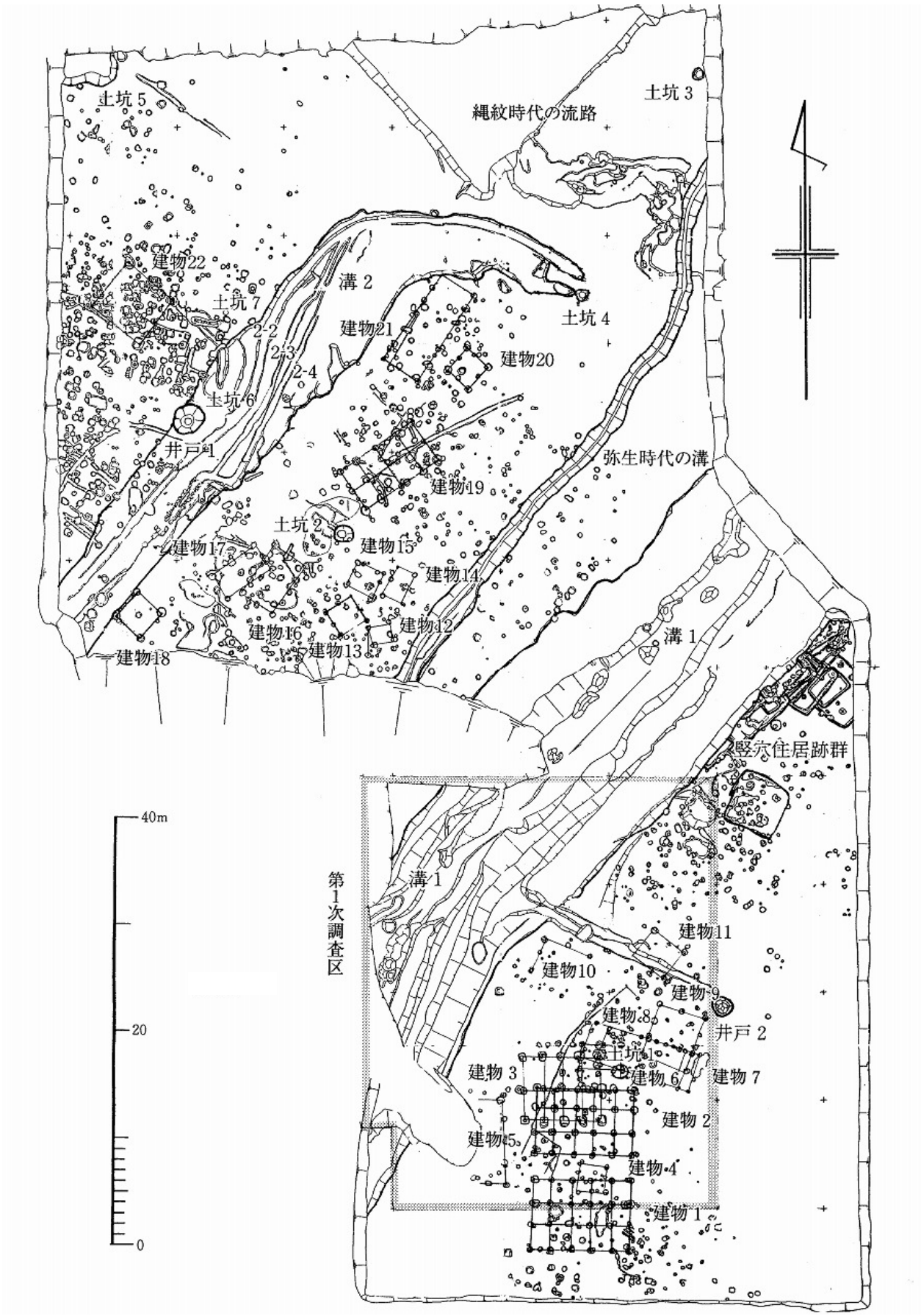
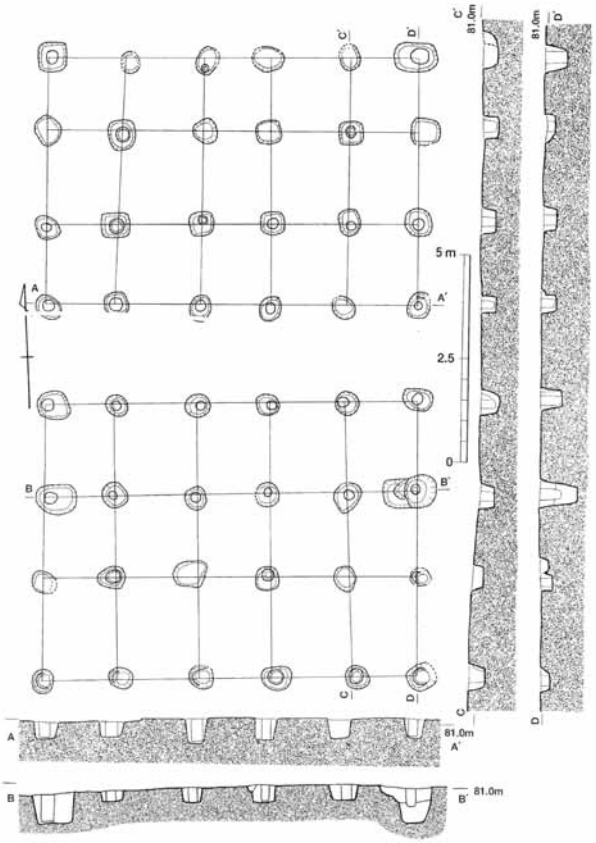


図 45　調査区遺構平面図

図 46　大溝調査風景　北東より



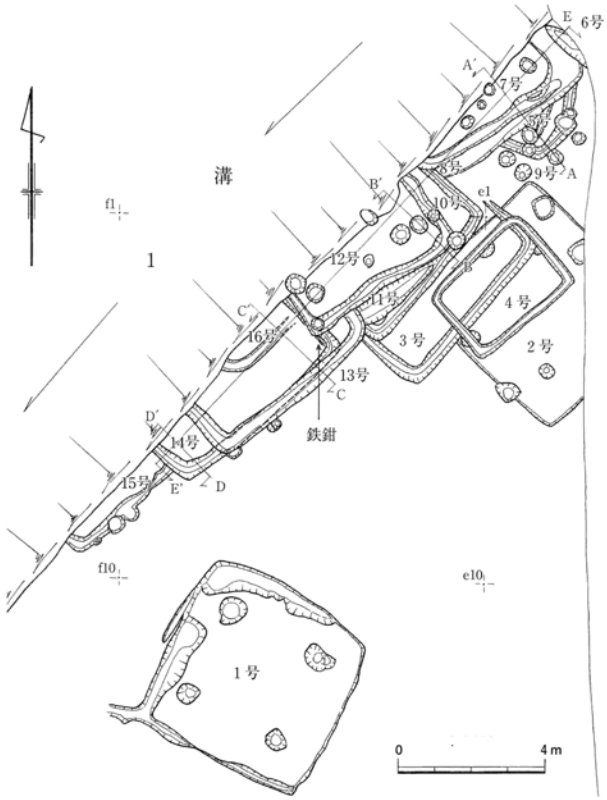


図 47　掘立柱建物 1（南）・2（北）平面図・断面図　　図 48　竪穴建物群平面図

図 49　竪穴建物群完掘状況　北より

いかと推定された大溝（溝 1）がある。この溝は幅約 15m、深さ約 2 m あり、これまでの調査で長さ 72m が確認されている。堆積層は中世、平安、古墳～奈良時代と大きく 3 つに分けることができる。溝の掘削時期は 5 世紀末頃で、平安時代前期に埋没し中世にはわずかな窪みとなっていたと考えられている。溝内からは大量の須恵器、土師器のほかに奈良三彩、銭貨、鉄滓、馬歯骨などが出土した。また、この大溝の北西約 30m にはこの溝と平行する幅約 8 m、深さ 0.5m の溝が検出された。ここからは 6 世紀前半から 7 世紀の土器類が出土しており、7 世紀には一旦埋まったものと見られている。その後、奈良時代に幅の狭い溝が 4 本掘削されている。

大溝の東側では竪穴建物群が検出された。これらのうちの一棟からは鉄鉗が、別の一棟からは臼玉、ガラス製勾玉、臼玉の材料と見られる石材などが出土した。時期は出土遺物から 6 世紀初頭から 6 世紀半ば頃までである。その性格については、建物跡には炉跡が見られないことから、この建物群は工房か工人の住居あるいは倉庫のような性格が考えられている。

竪穴建物群の南では、5 間× 3 間の高床建物が 2 棟検出され、並び倉と推定された。柱穴からの出土遺物は多くないが、時期は 5 世紀末頃と考えられている。

2 次にわたる調査によって、杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区及びその周辺は布留遺跡における中枢部分であることが明らかになった。この地域は、布留川の南岸を西に延びる低丘陵の高所にあって、北には布留川が流れ、南は幅約 150m の谷地形となっている。また西には先述の大溝

があり、東は 200m 程で石上神宮の外苑公園のある丘陵となっている。このように自然地形及び人為的な溝によって他と画された地域に、アゼクラ地区の居館に関わると考えられる石敷遺構（範囲確認調査）や、並び倉と推定される建物を含む大型の掘立柱建物群が検出されたことは、古墳時代の豪族の居館のありかたを考えていく上で重要な資料を提供したものといえよう。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　2010『奈良県天理市　布留遺跡杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区発掘調査報告書遺構編』考古学調査研究中間報告 25

埋蔵文化財天理教調査団　2012『奈良県天理市　布留遺跡杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区発掘調査報告書遺物編』考古学調査研究中間報告 26

14）第 29 次：豊井（打破り）地区（1990 ～ 92 年）

布留川の北 250m、豊井（宇久保）地区の南東 200m の地点で 1990 年 6 月 4 日～ 1992 年 5 月 1 日まで調査が行われた。

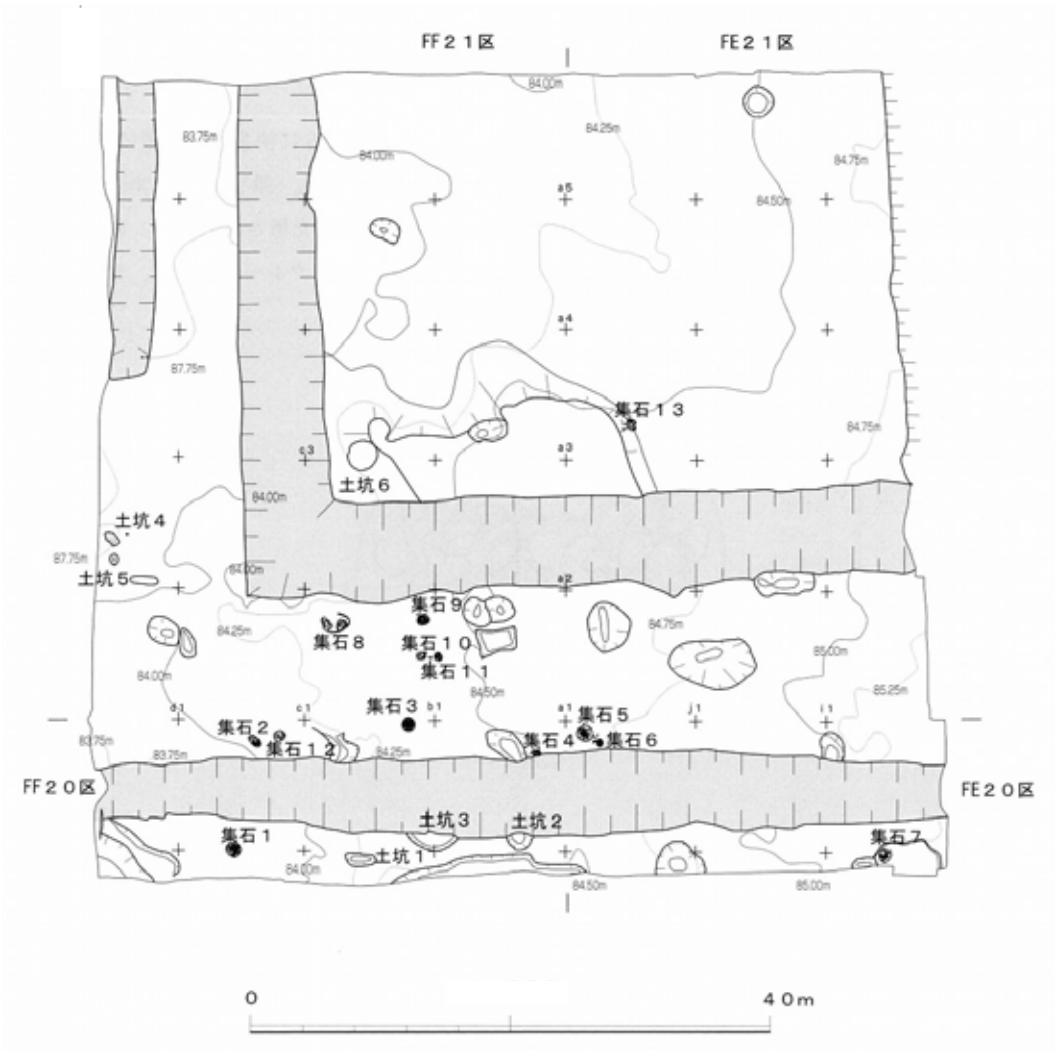


図 50　下層・最下層遺構検出状況（アミ目は中世の濠跡）

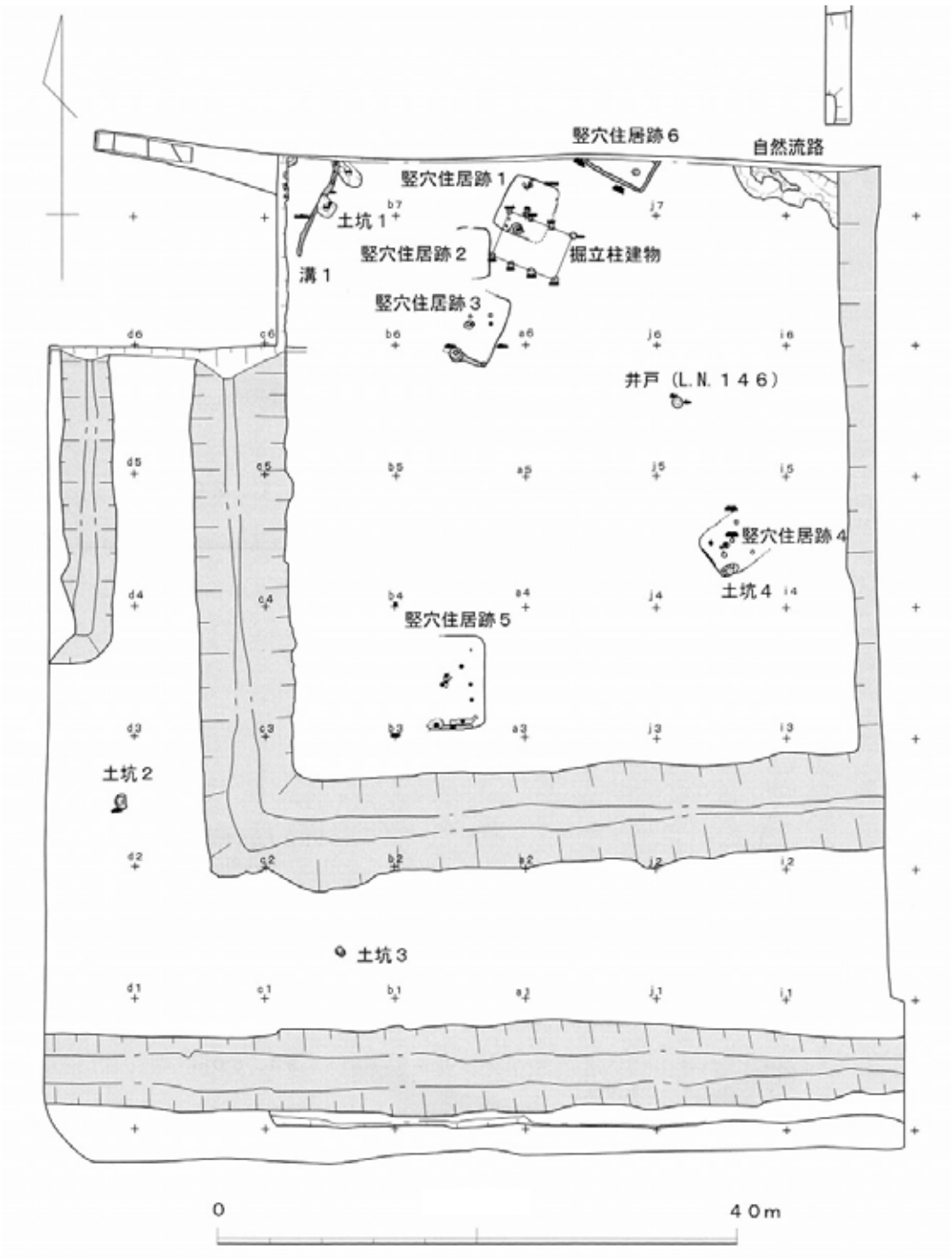


図 51　中層遺構検出状況（アミ目は中世の濠跡）

ここでは大きく最下層・下層・中層・上層の４層が確認された。最下層・下層は縄文時代早期で最下層では神宮寺式期の集石遺構が 14 基、下層では高山寺式期の土坑７基が検出された。

集石遺構は径 0.6 ～ 1 m、深さ 30cm 前後の平面円形のものが多く、集積した礫は赤く変色しており被熱したものと考えられることから、集石遺構は調理施設としての用途が推測されている。

下層の土坑は長軸が 1.3m ～ 3.3m 程の規模のもので、多くが楕円形を呈し、明確な性格は明らかではないが、なかには墓や竪穴建物の可能性が考えられているものがある。

縄文時代の遺物は約７万点出土している。土器は押型文土器が主で、神宮寺式土器と高山寺式

図 52　上層遺構完掘状況 (上が北)

土器が多く出土し、黄島式土器や穂谷式土器などが少量出土している。また、石器には石鏃、石錐、尖頭器、削器、掻器、楔形石器などがある。

中層では調査地北半で弥生時代末から古墳時代前期の方形を呈する竪穴建物を 6 棟検出した。竪穴建物 1 ～ 4 ・ 6 は一辺 4 ～ 5 m の規模であるが竪穴建物 5 は一辺 7 m と大型である。いずれも削平が著しく、深さは 5 ～ 25cm と浅く、全形の明らかなものはない。周囲には同時期の溝や柱穴が認められることから、本来の住居数は増えるものと考えられている。

これまでの調査では当該地区の南東 50 ～ 250m の地点で数棟の竪穴建物が確認されており、

弥生時代末から古墳時代前期にかけて豊井町の一帯に集落が存在したことが明らかとなってきた。

上層では 15 世紀後半から 16 世紀はじめにかけての中世の居館を検出した。居館は平面方形で東西 44m、南北 48m の規模があり、周囲には 10m の距離を隔てて内濠と外濠が二重に巡らされている。居館内からは掘立柱建物、井戸、溝、庭園などの遺構が検出されている。内濠は南辺部で内法 44m、最大幅 8 m、深さ 2 ～ 2.5m あり、断面は V 字形を呈する薬研濠である。内濠の内側では屋敷地縁辺部から幅約 4m の範囲の遺構が希薄であるところから、この部分に土塁が巡っていた可能性が考えられている。濠の底には青灰色粘質土が堆積していることから、水濠であったと考えられている。外濠は全体は不明であるが南で長さ 67m 以上を検出している。最大幅 8 m、深さは 2 m ある。断面は U 字状を呈する。内濠と同様水濠であったと考えられている。内濠と外濠の南には橋脚が検出されており、居館の入り口が南にあったことが分かる。濠内からは日用雑器が多く出土したほか、茶道具、大工用具、化粧用具、遊戯具などが見られた。

今回検出した居館は、調査地の北東 600m に所在する豊田城 (山城) に近いことや遺物の年代を考慮して、15 ～ 16 世紀頃に布留郷一帯を勢力圏においていた豊田氏の居館と推測されている。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　2013『奈良県天理市　布留遺跡豊井 (打破り) 地区発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告 29

15）第 32 次：杣之内 (大東) 地区（2000 年）

調査地は布留遺跡の南端に位置し、杣之内 (北池) 地区から南西に 100m の地点に位置する。調査は 2000 年 5 月 23 日～ 6 月 30 日に実施された。この調査では杣之内 (北池) 地区で検出した流路の下流部分を確認した。この流路は調査地区の東北東から西南西へ流れる、幅約 5m、深さ約 1 m の規模があり、長さ約 30m 分を検出した。出土土器は庄内式期から布留式期のものが混じる。ここからは梯子、板などの木製品や流木も出土している。また、この流路に降りるための足場も発見された。流路の南側には、これに平行する溝が掘られている。幅約 2.5m、深さ約 0.5m あり、長さは約 19m 分を検出した。ここからは大量の土器が出土したほか、遺存状況は良くないが木片も少量出土している。

このほか調査地区の東端近くで木棺墓を検出した。墓の上面が削平されており、深さは約 15 ～ 20cm しかない。出土遺物は弥生土器の小片のみであるため、年代の決定はできないが、周囲の状況から弥生時代中期末のものと考えられている。木棺は木棺材が遺存していなかったが、土色の違いから長さ 145cm、幅 49cm の大きさのものと判明した。副葬品などは全く出土しなかった。

【文献】

埋蔵文化財天理教調査団　2013『奈良県天理市　布留遺跡杣之内 (北池・大東) 地区発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告 28

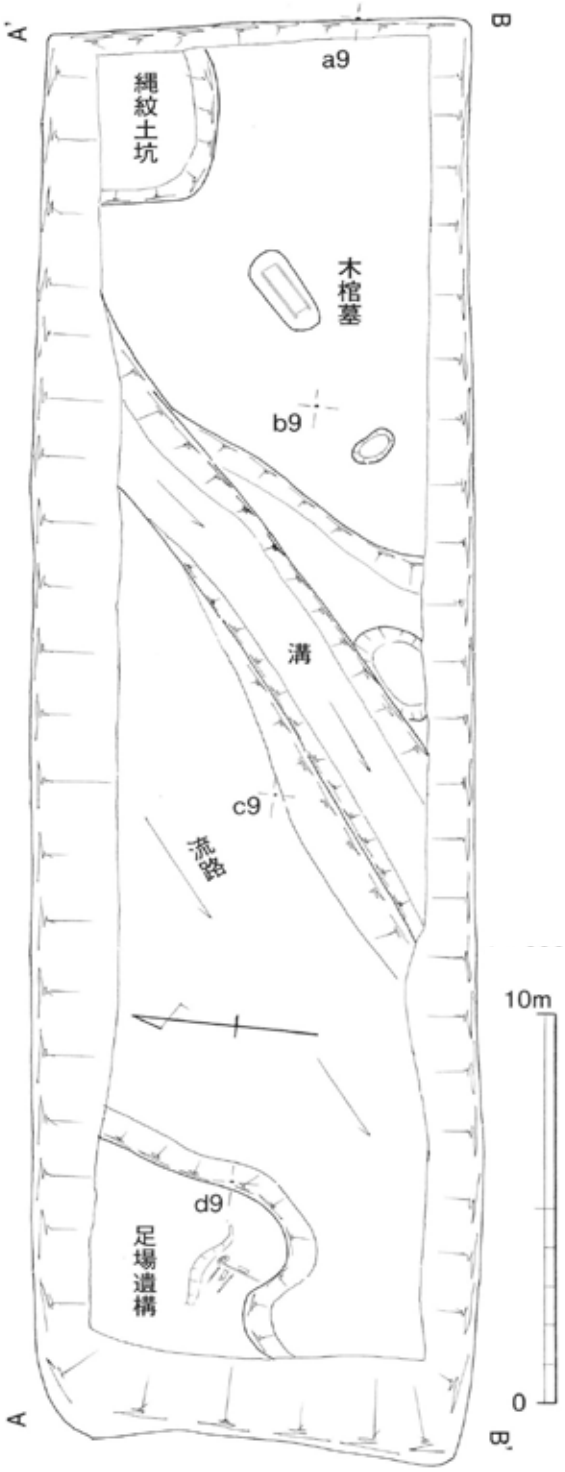


図 53　調査区遺構平面図

図 54　木棺墓検出状況　北西より